

あかこびと

2019年夏季号(99号) 2019.7発行

日本バプテスト同盟金沢文庫キリスト教会

〒2360046 横浜市金沢区釜利谷西 3-36-20

牧師 森島牧人・森島 恵 電話 045-783-5475

e-mail: church.kanazawabunko@gmail.com

[http:// kanazawabunkochurch.sun.bindcloud.jp](http://kanazawabunkochurch.sun.bindcloud.jp)

「私はあなたと共にいる」 創世記28：10～22 牧師 森島 牧人



今日の箇所は、ヤコブが旅の途中で夢を見たところから始まります。ヤコブについて、少し説明しますと、ヤコブはイスラエルの人々にとっては、「信仰の父」ともされるアブラハムの子、イサクの子どもです。その後ヤ

コブは神に、その名を「イスラエル」と変えられます。まさに、イスラエルの民、12族である、神の民の最初の人とも言えましょう。

このヤコブは、双子として生まれました。ヤコブには長子、兄エサウがいました。昔から、父の全ての財産は長子のものでした。しかしヤコブは、この共に生まれ育った双子の兄、エサウから、長子の権利を奪い、同時に、神からの祝福をも奪って行くのです。それは、兄エサウが、お腹をすかしている時に、食べ物を与えるかわりに、長子の権利を奪いとり、また、目が見えなくなっていた父イサクをだまして、自分がエサウだと偽り、その祝福を奪っていったのです。ヤコブは、イスラエルの祖とされる人物ですが、その人間性は、なんとも欲深く、ずるがしこく、恐れを知らない者でした。

この祝福を奪われた時に、エサウは叫んだ。「彼をヤコブとは、よくも名付けたものだ。これで二度も、わたしの足を引っ張り欺いた。あのときはわたしの長子の権利を奪い、今度はわたしの祝福を奪ってしまった」と。エサウは続

けて言った。「お父さんは、わたしのために祝福を残しておいてくれなかったのですか」と(創27：36)。

エサウは、父がヤコブを祝福したことを根に持って、ヤコブを憎むようになり、そして、心の中で言った。「父の喪の日も遠くない。そのときがきたら、必ず弟のヤコブを殺してやる」(41)と。エサウの怒りは、弟ヤコブを殺してしまおうと思うほどのものでした。

この様にヤコブは、策略を練ってあらゆる方法を使って、兄をだまし、父をだましてでも、自分が祝福を受け取ろうとして、事実、その通りに祝福を奪い取ったのでした。しかし、そのために得たものは、兄エサウからの憎しみ、恨みだったのです。

兄エサウが、弟ヤコブを、殺そうとしていることを察した母リベカは、ヤコブに、逃げるように教えるのです。この母親リベカのヤコブへの偏愛も、兄エサウの怒りを大きくさせたのだと思います。でも、とにかくヤコブは、リベカの教え通りにエサウから逃げ出して行くのです。

今日の箇所は、そのような逃亡者ヤコブが、夢を見たという箇所なのです。この時のヤコブは逃亡者でした。ヤコブの心の中にあったのは、祝福と喜びではなく、孤独と不安があったでしょう。否、単に、孤独や不安や恐怖という思いだけではなく、少なからず兄と父に犯した罪の意識、罪悪感もあったと思うのです。そのようなヤコブが、今日の箇所で夢を見ます。「する

と、彼は夢を見た。先端が天まで達する階段が地に向かって伸びており、しかも、神の御使いたちがそれを上ったり下ったりしていた」（創 28:12）。ヤコブは夢の中で、天まで達する階段を見るのです。

同じく、創世記 11 章には、人間が自ら塔を建て、天まで届かせようとした「バベルの塔」という話が出てくるのですが、このお話では、人々が力を合わせて、自分たちで天まで届く塔を作ろうとしたのです。人々は、自分たちの力のすばらしさ、自分たちは何でも出来る、という思いを表すために、この塔を作ろうとしたのです。つまり人間は、自分で天まで届く力を持っていると、神など必要ないと、考えていたということです。当時の考えでは、「天」とは神のおられるところであり、神の力が表される場所であると考えられていたのです。人々は、その「天」に、自らの力で行こうとしたのでした。神に頼ることなどは必要ない。自分で「天」に行くことができる。つまり、いのちの支配は自分たちでできるのだと表そうとしたのです。しかし結局のところ、神は人々の言葉を混乱させ、人間がお互いの言葉を理解することが出来なくすることによって、人々は、天まで届く塔を作ることは出来なくなったのでした。

それに対して、今日の箇所（創世記 28）のヤコブの夢では、その「天」と「地」とを神の御使いたちが行き来しているのです。これはまさに、人間が天に昇るのではなく、天におられる神が、その天から地にきてくださっている。神の方が天から地に来て、人間に関わってくださっていることを表しているのです。

神は、このように言われました。「見よ、主が傍らに立って言われた。『わたしは、あなたの父祖アブラハムの神、イサクの神、主である。あなたが今横たわっているこの土地を、あなたとあなたの子孫に与える。あなたの子孫は大地の砂粒のように多くなり、西へ、東へ、北へ、南へと広がっていくであろう。地上の氏族はすべて、あなたとあなたの子孫によって祝福に入る』」（創 28：13-14）。ヤコブは、今、不安と孤独の中、一人逃亡者として歩いていたのです。それは、以前の私たちの姿です。まさにカインの末裔（罪の子）です。しかしそのような、罪の子、ヤコブに対して、神は、かつて祖父ア

ブラハム、そして父イサクになされてきたものと同様の祝福の言葉を与えるのです。

この神の言葉は、ヤコブに、＜祝福とは、あなた自身が、頑張って、考えて、得るものではないのです。私が、あなたを導きます。だから安心して、私を信じなさい＞と言っているのです。自分で、どうにかして祝福を得ようとしてきたヤコブに、神は、それは私が与えるものであると教えているのです。まさにパラダイムシフトです。信仰とは、まさにパラダイムシフトなのです。ルターが言われた＜我ら赦された罪人＞なのです。長子でないヤコブを、長子兄エサウのように見せかける、兄の臭いが染み込んだ着物を着た者を長子のごとくに受けとめて下さる。つまり、赦されるとは、神の子でない、我らが、罪を、脱ぐのではなく、パウロが言うように、そのままに、罪人のその上に、キリストを着たものとして、祝福を頂くのだと。そのために、神の愛のしるしである十字架が、つまりイエス・キリストの出来事があるのです。

それはまさに、自分たちで頑張って天まで届く塔を作ろうとしていた、あの「バベルの塔」の話と同じ状態であったヤコブ、神ではなく自分の力で生きていたこのようなヤコブに対して、神は今一度、「わたしがあなたを導いているのだ」ということを示され、その中で、「安心して、私に信頼しなさい」と教えられているのです。詩編の作者は、「そのあなたが御心に留めてくださるとは、人間は何ものなのでしょう。人の子は何ものなのでしょう。あなたが顧みてくださるとは」（8：5）と語るのです。

そして神はこのように語られます。『見よ、わたしはあなたと共にいる。あなたがどこへ行っても、わたしはあなたを守り、必ずこの土地に連れ帰る。わたしは、あなたに約束したことを果たすまで決して見捨てない』と。そうです、神は、「わたしはあなたと共にいる」「どこへいってもあなたを守る」（創世記 28：15）と言われたのです。

その時までの逃亡者、罪人ヤコブは、もはや神からも見捨てられてしまったと思っていたのです。しかし神は、そのようなヤコブの心を知り、慰め、「わたしは、あなたと共にいる」、わたしはインマヌエルの神であると。「どこまで行っても、たとえなにがあっても、わたしは、

あなたを見捨てない」と、語りかけてくださっているのです。

この、言葉を聞いたヤコブは、眠りから覚めるのです。それはまさに、これまで暗闇にいて、どこに進んだらいいのか分からなかった者が、生きる道を見つけ出した瞬間でした。それは、神に対して盲目であった者が、目を開かれたように、ヤコブは目を覚ますのです。そして、このように言います。「まことに、主がこの場所におられるのに、わたしは知らなかった。」(創28:16)と。創造主なる神が、今、共に生きていくくださるということ、忘れてしまっていたことに、気が付かされるのです。

神が、共にいてくださるということを知ったヤコブは、神を礼拝し、その恵みに対して応答の行為を行っていくのです。つまりヤコブは、これまで生きていた生き方、自分で生きようと思っていた生き方から、神を中心に生きる生き方へと、方向転換を決心したのです。ヤコブはまた、誓願を立てて言った。「神がわたしと共におられ、わたしが歩むこの旅路を守り、食べ物、着る物を与え、無事に父の家に帰らせてくださり、主がわたしの神となられるなら、わた

しが記念碑として立てたこの石を神の家とし、すべて、あなたがわたしに与えられるものの十分の一をささげます。」(創28:20-22)

ヤコブは、「自分の旅路を守り、食べ物、着る物を与え、無事に父の家に帰らせてくださり、主が、わたしの神となられるなら」と言います。しかしこれは、「神がこのようにしてくださるのならば・・・」という、条件付きで信じますといったのではなく、「神が、このようにしてくださる。」と信じた上で、「だからこそ・・・わたしは神に、このように、応えて、生きていきます」と、言ったのです。それは、自分でどうにかするのではなく、ただ、神の恵みのうちに生きるという応答であり、決心であり、信仰告白なのです。

預言者の口を通して神は、このように言われます。「まことに、イスラエルの聖なる方、わが主なる神は、こう言われた。「お前たちは、立ち帰って、静かにしているならば救われる。安らかに信頼していることにこそ力がある」(イザヤ30:15)と。わたしたちは、どのような時にあっても、共にいてくださる神を信じて、その神と共に、歩いて行きたいと思います。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

「主との出会い」

岩垂 周太

私がバプテスマを受けたのは大学3年生のクリスマスの2週間前でした。それから1年と5か月になりますが、ここではそれよりももっと遡り、私がキリスト教に出会ったことについて証しさせていただきます。

生来、私はクリスチャンファミリーというわけでもなく、神社やお寺に初詣やお墓参りなどに行くぐらいでした。初めてキリスト教というものに出会ったのは、大学に入ってすぐのことです。私は関東学院大学の卒業生ですが、関東学院大学はキリスト教主義の大学で、聖書の授業が必修科目としてカリキュラムに組み込まれていました。いくつかの講義があり、新約聖書と旧約聖書に分かれていました。私は新約聖

書の講義をとっていましたが、チャプレンの先生が講義の際に「イエス・キリストの愛」を特に大事に話されてきました。それは私の考えていた大学の講義とは良い意味でまるで違っていました。

大学というものは知識を重視するため、ここまでみ言葉に対してかなり突っ込んだ内容を扱うのは全くの想定外でした。「聖書には目を覆いたくなるような人間の醜さも書かれているけど、それでもなお主は私たちを愛してくださる」というのがその時のメッセージでした。そして私の胸を大きく打ったのはこの言葉でした。「誰かが右の頬を打つなら、左の頬をも向けなさい」(マタイ5:39)。つまり憎しみに対

して憎しみに歯向かわず、あなたの隣人だけではなく敵をも愛しなさいということでした。このみ言葉を聞いた講義で教会に行こうと思いましたが、不思議なものでそれから教会生活が続いております。

今となってはすべて主のご計画であったと思わざるを得ません。高校生の時、ある先生が、「人生に偶然はない。すべて必然である」といって下さいましたが、主が最善をなして下さるが故に必然となるのだと私は思います。主

の恵と導きのうちに出会わせてくださった方々に感謝して、毎週の礼拝生活を続けたいと思います。



☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

「神さまに導かれて」

稲垣 柚奈

私は今、関東学院の中学・高等学校に通っています。中学に入学して聖書を学び始めました。そして高校生になると友人と一緒に校外の教会に通うようになりました。

最初は石川町の教会に通っていましたが、もっと近い教会が良いと思い、父に自宅近隣の教会を捜してもらいました。そこが金沢文庫キリスト教会です。

この教会の牧師森島(恵)先生は以前、私の曾祖母が通っていた教会の牧師であったということが分かりました。一度訪ねてみようと思い、初めて父と一緒に訪ねました。

今まで行ったことのある教会とは違って、すごくアットホームで居心地よさが第一印象です。さらに驚いたことには、森島牧師は私の通っている関東学院中学・高等学校のOBであること、また、私の親戚の通っている教会の先生が両牧師の知人であるということです。

「すごすご縁ですね！」と父が話しますと、「縁ではありません。神様に導びかれたのです！」との、恵先生のご返事。その言葉がすごく私の心に響き、神さまの存在をとっても身近に感じました。

「ユーミン(松任谷由実)の『やさしさに包まれたなら』のフレーズで、『小さい頃は神さま

がいて』とある通り、神様は本当に存在するんです!!」と、礼拝での森島 豊先生(青山学院宗教学主任)のメッセージがありました。私も小さい頃は神さまを身近に感じて、何かあるごとに神さまにお祈りしていました。しかし大きくなるにつれて、だんだんと神さまの存在が遠く離れてしまいました。今回、この教会に来ることで再び神さまを身近に感じ、もっと神様について知りたいと思うようになりました。

これからの私の人生にはきっといろいろなことが待ち受けていると思います。楽しいことばかりでなく辛いこと、苦しいこともあるでしょう。今回私がこの教会に導かれたのと同じようにすべては意味のあるイエス様の導きと信じています。どんな時もイエス様への感謝の心を忘れずに、生きていこうと思います。その決心の意味でもバプテスマを受ける決心をしました。



「青空のむこうへ」

西山 律子

昨年6月、弟は入院しました。

パーキンソンの持病があり、食べ物を飲み込む力が弱くなり、手足も不自由となりました。肺炎が治り、鼻腔栄養を開始するとまた肺炎となり点滴のみになりました。「お腹が空いたなあー」と弟。「いいよ、元気になったら、スープや好きな物たくさん食べようね」と家族。

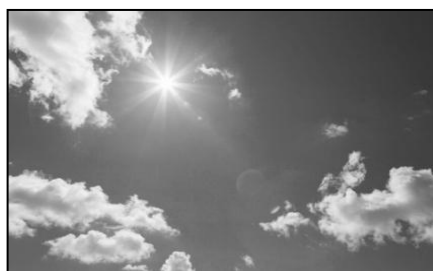
8月中旬、弟が「シーユーアゲイン」と言うのと妹が「四十肩？」と問う。「ちがうよ、シーユーアゲインだよ！」との返事。皆で笑いました。しかしこれが聞き取れる弟の最後の言葉で、弟の口からもう声が出なくなりました。

肺炎から敗血症となり、眠る時が多くなりました。牧師夫妻から度々お祈りして頂き、祝福と慰めをいただき、平安な入院生活でした。もう一度自宅に帰れると思っていた弟は、ついに9月末静かに亡くなりました。

葬儀の日の雲一つない青空が印象的でした。いつもにこにこしていた弟の笑顔が青空にあるようでした。幼い頃から今まで楽しく過ごした懐かしい思い出、弟に感謝することがたくさんありました。共に賛美することができて、幸いでした。

牧師夫妻、教会員の皆さまからいつもお祈りいただき、力をいただき、悲しく辛い時をのり越えることができました。

ハレルヤ !! 主にあって感謝します。



☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

「信仰の歩み」

根岸 千恵子

創世記一章に「初めに、神は天地を創造された」とあります。このみことばを信じる事が出来れば揺るぐことはない、と思うのです。

人の体は不自由の無いように「対」で造られています。でも口は一つしかありません。なぜでしょう？口は悪しきことばを発するため、災いのないように一つだけ、と私は勝手に思っています。また、美しい星空を見る時、神様の御業を感じるのです。

人間の知恵は進化し、さまざまな物を見つけ出していますが、これらは初めに神が創造されたものを探し出したにすぎない、と思うのです。

不安で疲れた時、「神様、神様！」と何度も声を出して祈ることがあります。「疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとにきなさい」(マタイ 11:28) このみことばを想い、神様はそばに居て下さる、と、慰められます。

この様な経験を重ねながら私の信仰は少しずつ確かなものになります。感謝です。

夫は「さっき独り言を言ってたぞ!!」と、呆けたと心配します。確かに記憶力はかなり低下しましたが・・・。

幼い頃手を引かれ教会に通っていたからか、教会は故郷のような懐かしさがあります。教会の十字架を見るといつも懐かしい想いでいました。およそ30年前、この教会堂の入り口に「いつでもお入りください」との看板に惹かれて、礼拝を守り始め、やがて受洗しました。途中私のわがままで一時期この教会から離れていましたが、イエス様のお導きで、再びこの教会で礼拝を守ることが許されて感謝しています。



「揺るぐことなく信仰に踏みとどまり、あなたがたが聞いた福音の希望から離れてはなりません。」

(コロサイの信徒への手紙 1:23a)

母の日も、クリスマスやイースターと同じように、教会から始まりました。やがて、教会以外でも、母の日として知られるようになりました。

いつもお世話になっているお母さんに、感謝の気持ちを伝える方法として、カーネーションを贈る人が多いです。1年中で1番カーネーションが売れる日です。そして、普段よりもぐんと値段も高くなります。

1908年5月、アメリカのアンナ・ジャービスという女性が、教会学校で長く教えていた母親を記念して追悼会を行いました。そのとき、ジャービスさんはお母さんの大好きだった白いカーネーションをたくさん会場に飾り、帰りに皆に配ったのが始まりです。この母の日の行事を全国に広げ、その後20年ほどの間に全世界に広まっていきました。やがて、赤いカーネーションは生きてお母さんを、白は亡くなったお母さんを表すようになったそうです。

“母の愛”というのは、“神様・イエス様の愛”に近いと言われます。決して、お父さんは、子どもを愛する気持ちが少ないわけではありませんが。

私は、自分の鼻水の味を知っています。風邪を引いて鼻水が出たとき、わざわざ舐めたわけじゃありませんが、味が分かります。しょっぱいです。でも、ほかの人の鼻水の味は分かりません。当たり前です。他の人の鼻水の味を知っていたら変です。

私の母からこんな話を聞いたことがあります。私の姉が赤ちゃんの時、風邪を引いてしまい、鼻が詰まって苦しそうにしていたそうです。赤ちゃんですから、自分で鼻をかむことができません。そこで母は、赤ちゃんの鼻に口をつけて、ズルズル吸い出したそうです。

母親でなければ、子どもを愛していなければ絶対にできることではありません。

次は、足の裏の話です。自分の足の裏を舐めたことがある人はいないと思います。舐める必要がないし、汚そうですね。

私の娘が幼稚園に通っていた頃のお話です。家の中で、画びょうを踏んでしまい、痛い、痛い、と泣き出しました。私の娘のお母さん、要するに奥さんですが、飛んできて娘の足の裏に口を付けて、傷口を吸い始めました。錆びた画びょうや釘を踏むと、そこから病気になることがあるからでしょう。少しも躊躇せず、直ぐに吸い始めたのを見て、お母さんが子どもを愛する気持ちは凄いなと思いました。

本で読んだ話ですが、もっとすごい話、母親の愛の強さが分かる話があります。

お腹の中に赤ちゃんがいる人が盲腸炎にかかってしまい、手術することになりました。痛くない様に麻酔をするのが当たり前ですが、麻酔が赤ちゃんに悪いという事が分かると、赤ちゃんに害がないようにと、麻酔をしないで、盲腸の手術を受けたのです。私などは、ちょっと指などを切っただけでも大袈裟に痛がるのに、お腹を麻酔なしで手術することなど、到底考えられません。

お母さんは、愛する子どもが病気で苦しんでいるのを見ると、できることなら、自分が子どもに代わって苦しんであげたい、と思います。でも、残念ながら代わることはできません。

イエス様は、私たちがどんなに頑張っても赦されない罪を、私たちに代わって十字架におかかりになって赦してくださいました。私たちを愛してくださるからです。

イエス様の愛とお母さんの愛、どちらも私たちにとってなくてはならない愛です。その愛に応えて、自分も愛する者として生きていきたい、と思います。



「神に仕え、奇跡を招いた人 才木正雄先生の生涯をふり返って」 白井 豊子

2019年3月14日に天に召された才木正雄先生は私たちの教会に関係の深い方でした。

才木先生は、故白根新治牧師の関東学院時代の後輩にあたり、「白根先生から頼まれたらすべて引き受けます」と語っておられるほどの間柄でした。礼拝説教にも時折協力して下さり、さらに献金という形で、新会堂の建築にも度々ご協力くださいました。

私は腹話術を先生から教わり、個人的に親しくさせていただき、先生の信仰の歩みにふれさせていただきました。神に徹底的に仕える生き方をなさり、奇跡をも起こされた才木正雄先生の生涯を皆様にお知らせいたします。

才木先生は1928年（昭和3年）7月23日、土用丑の日、寺の総代を務める家の長男として誕生。「丑之介」と名付けられそうになったが、最終的には「正雄」と命名されたそうです。

1952年（昭和27年）2月、勤めていた県庁の健康診断で、「重症の結核で手術をしなければ三年の命」と宣告されたそうです。悩みぬいた先生は、手術を拒否し、県庁をやめて、三年間好きなことをして生きようと決意しました。そこで「青空こども会」を開始しました。横浜教会員だった才木先生に強力な助っ人が教会から駆けつけてくれました。その助っ人こそ春江さん、1953年（昭和28年）結婚することになりました。春江さんは、正雄さんは絶対死ぬことはないと確信して結婚したと話しています。春江さんの父上、姉上をも伴う結婚で、一挙に大家族となりました。才木先生は自分にとって結婚は奇跡であり、感謝のみですと語っています。

その後、無認可の「ゆりかご保育園」を開始します。障害児や一人親家庭の子をも含む統合保育の始まりでした。1963年（昭和38年）5月、横浜に在る貧しい保育園で熱心に取り組んでいるところを捜されていた秩父宮妃殿下の目にとまり、視察訪問を受けました。来られる前夜に、通られる道が急遽舗装されたそうです。

その後法人保育園として認可され、職員の待遇も公務員並みになったそうです。

1944（平成6）年3月、才木先生65歳の時、ゆりかご園を終了。42年間に2,386人の子どもたちが巣立ちました。「この子どもたちは今もみんな私たちの大事な子どもです。その意味では私たちは日本一の子沢山です」と先生は語っておられます。

退職後先生はボランティアとして腹話術人形の「ノンちゃん」と共に、知的障害者施設の恵和学園はじめ、近隣の老人ホームに度々訪れておられました。先ず、昔の小学唱歌を老人たちと共に歌い、その後昔の歌詞の意味を問うクイズを出します。それから「孫をつれてきます」と言って人形「ノンちゃん」との掛け合いの腹話術をなさっていました。

腹話術の脚本の中で心に残っているのをとりあげてみますと、一つは「命」をテーマにしたものです。命とは見えないけど何かと聖書で調べたら「命はどんなものよりも大切な宝物です」とあるよ、とノンちゃんに伝えるのです。「かけっこ遅くても、病気でも、年をとってもみんな宝物」と伝えるのです。

二つ目はしあわせの話。お菓子を貰えたり、かけっこが一等なのがしあわせかな？お金持ちならいいのかな？本当のしあわせは、「仕合わせ」と書くように、お互いに仕え合うことかも、とノンちゃん考えるのです。

2017年（平成29年）5月に最愛の奥様を、8月は義姉を、住まいのカルディアの家で失い、先生自身食が細くなっていかれたそうです。

思えば24歳で「3年の命」と宣告されたものの、神は才木先生を守り抜き奇跡を何度も起こされて、90歳8カ月で生涯の幕を下ろされたのでした。今は天国で奥様や白根牧師とも話されているのではないのでしょうか。



育児を通して思うこと ① ニューヨーク編 浅輪 一郎

「子供たちをわたしのところに来させなさい。妨げてはならない。神の国はこのような者たちのものである。」
(マコ10:14)

私は妻のニューヨーク転勤に伴い、2008年から主夫となりました。当初、私は育児など全くたやすい事だと考えていました。それどころか育児というものは大の男がいつまでもすべき仕事ではないとさえ思っていました。果たして、当時一歳半の娘は心ここにあらずの私の育児を見透かしてか、私がおんぶをしても抱っこをしても、一日中泣き続けるばかりでした。ニューヨークの治安への不安、トイレトレーニングにおけるストレス、第二言語習得の問題も重なり、次第に、娘の顔からは笑顔が消え、母語である日本語さえ発しなくなりました。私はさすがのように娘を日本語の幼児教室に通わせ始めました。ある日の授業中、娘は大声を出して泣き出しました。私は娘を外に連れ出し、叱りつけました。一度や二度のことではなかったので、もはやどうしていいか分からず、そのまま幼児教室を退会させることにしました。育児なんてたやすい事であるはずなのに、笑顔を全く見せなくなった我が子と同様に、私は迷い自信を失っていきました。

光明を見出すきっかけは一冊の本に記述されていた「本気で子どもと遊び込む」提案にありました。果たして、子どもと一緒に思いっきり遊ぶだけで娘は本当に喜んでくれました。そんな娘の無邪気な笑顔は、私に何かとても「大切な事」を教えてくれているように思えました。そんなある日、娘と手を繋ぎスキップしながら横断歩道を渡っていくと、見知らぬ女性が、擦れ違い様に、満面の笑みを浮かべながら私たちに声を掛けてくれました、「God Bless You!」当時、私はまだクリスチャンではありませんでしたが、その一言はずっと私の心に残り続けました。

私が育児を通して感じる事が出来た「大切な事」と、その学びに応えるかのように与えられた「God Bless You!」は、「神の国」が存在するということを伝えてくれていたのかもしれない。

(日本バプテスト神学校 実習生)

☆☆☆☆☆☆☆☆

「Church Café 講座 キリスト教入門『ブーバーに学ぶ』 斉藤啓一著から」 犬塚 志朗

「真の対話」「真の交わり」ってなに？
(逸話)聖地巡礼の途中、身分を知られないように貧しい巡礼者の姿でフランスのルイ九世は、エギディウス修道士を予告なしに訪問した。修道院の門前で面会を求めたところ、エギディウスは靈感によって誰が来たかを悟った。全くの初対面であるにもかかわらず、前からの知人であるかのように、二人は倒れかかるように、深い尊敬の念をこめて抱擁を交わした。そして最初から最後まで、お互いにひとことも口をきくことなく、完全に沈黙したまま別れた。

あとで従者が、なぜ言葉をおかけしなかったのかと問うとエギディウス修道士はこう答えた、「私たちが抱擁を交わすや否や、神の智の

光があの人を、あの人に私の心を明らかにしたからだ。お互いの心の内を完全な慰めと共に感得した」と。

ブーバーは述べています、「二人の意識が同一の振動数で震えての対応なのだ。二人の人格そのものの共鳴であり、触れ合いであり、お互いを認め合っているという確信である」と。さらに「これこそが真の対話であり、出会いであり、交わりである。二人は神と共に共鳴し、触れ合い、認め合い、本質的に結ばれたのだ。神との交わりを通して『畏敬の念』が、他者との交わりを通して『魂の歓び』が湧き上がってくる」と。また「いかなる人も、その心の中に『愛に共鳴する弦』を持っている。『真の交わ

り』を通して、互いの弦を共鳴させ合うと『愛の和音』が鳴り響き、二人は『完全な慰め』を得るのだ。神の属性を共鳴させ、両者の間に神の息吹を現出させること、他者との交わりと神の交わりを一つにさせること」と。

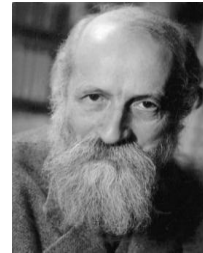
・・・・・・・・・・・・・・・・

神の愛を通してならば、言葉を介さなくても「真の対話」「真の交わり」は実現できること。そして親子、夫婦、隣人から世界地球規模に到るまで平和をもたらすこと。

神はあらゆる手段や状況を通して人間に合図を送っている。が、人間はそれに気づかない。

気づいて神に応答してきた人も大勢いる。聖書の御言葉から気づかされ神に合図を送り返している人もいる。

真の対話、交流は、ブーバーの主張する「我と汝の関係」を構築できれば対人間のみならず、対動植物等生命を持つものから、歓びと刺激を与えながら磨いて生命が吹き込まれた対芸術作品、対鉱物に到るまで広がること、等々。最近の Church Café 講座を通して学びました。



シニア健康コーラス(飯塚三枝子先生指導) 毎月末の水曜日



音楽礼拝(エルピス・ゴスペルバンド) 毎第五主日礼拝



イースター・ペンテコステ礼拝
トーンチャイムによる前奏



CS 教師就任式



聖金曜日夕礼拝

CS 礼拝
司会の生徒



Church Café 講座後のピクニック



転入会式



バプテスマ式
イースター礼拝



子育て講演会 大賀たえ子先生

腹話術によるメッセージ
ペンテコステ合同礼拝



ペンテコステ合同礼拝



「金沢文庫キリスト教会の10年後の夢」礼拝後の愛餐会で分かち合いました。

①私が初めて金沢文庫キリスト教会に来たとき ②教会の10年後の夢

明石怜晃くん（小学4年生）

- ①2015年4月小学一年生の時
- ②今のままでよい！

浅輪一郎さん（神学生）

- ①今年の4月
- ②地域の方々と共に祈りの教会になること。

犬塚志朗さん（教会役員）

- ①1966年 50年前
- ②地域の人たちに親しまれ、喜びをもって礼拝を守っている姿。私は天国で見守ってる。

上野朝澄さん（CS保護者）

- ①今年の4月です。娘の学校の宿題をきっかけに、下の子と一緒に教会学校に通っています。
- ②教会学校に参加させていただき思うことは、子育てママ達が、今よりもっと心が休める場所であるようになってほしいと思っています。

上野彩愛さん（中学生）

- ①今年の4月です。
- ②いつもみんなの笑いがたえず、神様とい時間が多い、楽しい教会がいいです。

石川万奈美さん

- ①今週の6月2日です。大学生のころ他の教

会に行っていたこともありましたが、金沢文庫キリスト教会に来ることが出来、教会で聖書や、イエス様のお話に触れることが出来て良かったです。

- ②これからも続けて通うことが出来て、開かれた教会で、家族も通ってくれているといなと思いました。

石上優大さん

- ①先週の6月2日です。
- ②教会では自分の想いを話せる場であるべき（悩み、苦勞など）、自分の内をさらけ出すには「信頼」が必要だと思っている。でも信頼と言うものは簡単に手に入るものではない。お金で買うことも出来ると思うが、それを「信頼」というかどうかは微妙なところ。たとえすべてを失ってもそこに行けば生きていける。生きる希望を得られる場所であってほしい。

梅谷興三さん（教会役員）

- ①20年前
- ②世界平和につながる宣教の方針(具体的に)が教会員の中から生まれること。世界の歴史は、キリスト教等一神教がその当事者であり、古くは十字軍、現今もキリスト教国でもある最強の国(米国)がたえず平和を脅かしていることを思い残念に思っています。

(近くはベトナム戦争)で、ブーバーの様な思想が広がることも非常に大切なベースです。

梅谷道子さん

- ①約28年前
- ②CSの子どもたちが成長して、地域の人達の導き手になってくれたらなあと思います。小さくても良いから、みんなが愛し合い助け合っていく教会がいつまでも続きますように願い祈ります。

白井豊子さん

- ①35年前
- ②年をとっても、神に守られ心は幼子のようにでありたい。いろいろな悩みを抱える人が気軽に来られて、多くのスタッフ(会員)が対応出来るようでありたい。

関根侑紀さん

- ①今日初めて教会に来ました。
- ②教会に来る前までは、少し堅苦しいイメージがあったがいざ来てみると良い人ばかりで、また来たい!と思えるほど良かったので、誰でも気安く入れるようになってほしい。

根岸千恵子さん

- ①30年前頃
- ②どのような時も惑うことの無い、神様に守られ神様に喜んでいただけるキリスト者でありたいと思います。

西山茂樹さん・律子さん(教会役員)

- ①3年前です
- ②教会の裏の家を購入して、牧師館になっている。孫が2人、17歳、13歳でクリスマスチャンになっている。

畑田敬祐さん

- ①今日初めて教会に来ました。
- ②一度集まった仲間とまた元気に会える場所であってほしい。(震災などに負けないように)

羽入田悦子さん(教会役員)

- ①2006年
- ②大きくなったもみの木のイルミネーションの美しさが評判となり、アドベントに入ると夜は大勢の見物客で賑わっています、教会を訪れる方には牧師以下教会員50名が当番制でお茶のおもてなしをしています。

羽入田毅さん(教会役員)

- ①2012年12月23日
- ②牧師館が与えられますよう。近隣の方々が教会員になられ、会員数が50人(椅子の数と同じ)になりますように。

星野浦男さん

- ①15年位前。今から10年前の2009年のイースターにてバプテスマを受けました。
- ②若い人の多い教会になってもらいたいです。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

平日・週末の Church Café 講座の御案内

キリスト教入門講座 水曜日 10:30~12:00
テキスト「ブーバーに学ぶ」 斉藤啓一著
賛美歌を歌おう会 木曜日 10:30~12:00
CS聖書研究会 土曜日 13:00~15:00

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

編集後記 (広報委員会:記 犬塚志朗)

今年度本教会主題聖句「喜びをもって主に仕えよう」(詩100編、ヨハネ15:5)のもと、1. 宣教する教会、2. 霊的成長・霊的訓練 3. 礼拝の充実、奏楽者・CS教師の確保・研修 4. 近隣・地域社会への宣教 5. 本教会の法人化 6. 教会墓地の検討 7. 招聘の準備・・・との具体的な宣教課題を掲げ、すでに3カ月が過ぎました。主の御護りのもとで年度末には与えられた主題と課題の成果の報告ができるように願っています。これまで多くの方々が支援して下さいたことを覚えて感謝致します。皆様の上に神様の祝福が豊かにありますようお祈りいたします。在主